

「何でそうなるんだよ。」

数学の問題を解いていると、また、奴が口を挟んできた。

「何が？ちゃんとやっくんじゃん。」

イラつきながら返事をする。奴は、黒縁のメガネをクイツと上げて、あからさまにため息をついた。

「何で出来ないんだよ。」

奴がいつも使っている青いシャーペンの芯を出す。この仕草、いつも見とれてしまう。

「どうして、ここに△があるのに、△を求めようとしてるんだよ？」

そんなに△が好きなのかよ、お前？

奴がシャーペンで△48という文字に丸をつける。

「あっ…！」

今まで求めようとしていた△が既にそこにあつたとは気が付かなかった。△48を代入して計算をやり直す。

「問題をちゃんと読めよ。てか、読まないで解けるとでも思ってるのか？」

奴が左手で、器用にシャーペンを回す。こっそりその手を見つめる。：綺麗な、手。

「読んだよ。読んだけど気が付かなかったの。大体、△の存在感がないから忘れられるんだよ。」

「おい。お前なあ。△に謝れ。お前よりは△の方が役立ってるよ。」
奴がふん、と鼻で笑い、右耳を触る。これは、人を馬鹿にしている時のクセだ。良かった、怒らせた訳じゃなかった。というか、多分こ

いつ、今日は機嫌が良い。だって、ずっとさつきからシャーペンを回し続けている。

「おい、ぼーっとするなよ。」

そう言っつて、私の額をぺちりと叩く。顔の温度が少し上がった気がする。赤くなってないといいけど…。

奴は暫く私の顔を見て、優しい笑顔で髪をぐしゃぐしゃしてくる。

なんだよ？

「お前、犬みたいだな。」

はい？

「は！なんだよ、それ！」

「あー、はいはい。おすわりおすわり。ほら、早く△求めろよ。」
悔しかったけど、椅子に座り直して、△を求めた。

△75

「終わった？。答え、合ってる？」

奴にノートを渡す。奴は、読んでいた本から顔を上げ。

「ん？やっつと終わったか？。退屈すぎて本なんか読んじやったじやねえか。」

いや、知らねえよ！

奴はノートを受け取って、答えと見比べる。

「おし！正解！ベリーグッドだ。ハナマル書いてやるよ。」

「要らない！中3の女子がハナマル貰って喜ぶわけないだろ。あー、書くなつて！」

手元に帰ってきたノートには、不格好なハナマルが赤のペンで

かでかと書いてある。てか、でかいな！なんでノート半分も使っちゃうんだよ。

「もう！ほんとに書いてんじゃん。お前、何歳だよ。」

「健全かつ、イケメンな15歳ですが？てか、あれだな。48と75って、婚約数だな。」

「ふーん。え？何それ？知らない。初耳。」

ノートを机に置いて、奴の方を見る。：反則だろ。なんでそんな真剣な顔で私のノート見てんだよ：。長めの前髪がメガネにかかっているのも構わないで、真剣な目で。

「…っ！」

思わず何も言えなくなっって目をそらす。不意に、奴が口を開いた。

「お前、数学のとき寝てただろ。授業で言われたぞ、婚約数！」

奴はいつものヘラヘラした顔に戻っていた。

「言ってたっけ？そんな事？」

「言ってたよ。えっと、婚約数。」

奴はニヤっと笑ってノートの隅にシャーペンを走らせる。婚約数。

ふーん、やっぱ知らね。

でも。ノートを引き寄せて、奴の傾いたクセ字を見つめる。

少しだけ、興味あるかも。

「やっぱ、知らない。ねえ、教えてよ、婚約数。」

一瞬だけ。ほんの一瞬だけ、奴の目がキラリと光った気がした。

「はあ？だからあ、これと、これだよ。」

$X = 75$ $Y = 48$

さっきの問題の解？

「 $X = 75$ が婚約数なの？」

「いや、違う。75と48のペアを婚約数って言うんだよ。」

奴が75と48にそれぞれ丸をつける。面倒臭そうな口調とは反対に奴の表情はだんだん明るくなっていく。

「ふーん。」

だめだ。全然分かんない。

「おまえ、ほんとに興味あんの？」

奴の目が細くなる。疑ってる顔。嘘なんてつかないよ。アンタにだけは。

「ちゃんと説明してよ。じゃないと、分かるもんもわかんないでしょ。」

奴にノートを差し出す。もちろん、新しいページを開いて。ちゃんと説明しろ！奴は、それを待っていたかのようにニヤっと笑うとノートに手を伸ばす。

「おまえにはちよっとレベルが高いかもなあ。」

シャーペンを、嬉しそうに「回くるっと回した。奴のクセ字が私のノートに踊り出す。」

「婚約数とは、異なる2つの自然数の組で、「と自分自身を除いた約数の和が、互いに他方と等しくなるような数の事である。」

自分のノートを開きながら話す奴の声が明るい。本当に楽しいんだろうな。：でも、やっぱり、私にはレベルが高かったかも。うん、

理解不能！

「ふーん。凄いなだねえー」

奴が大きなため息をつく。

「あー、やっぱお前には無理か。はい、じゃそういうことなんで大人しく参考書を解いてください。」

奴はノートをこつちに返そうとする。ちよ！待て！

「ちよっと！待て。誰がわかんないなんて言ったよ！聞き取れなかっただけだよ。もう一回言つて。てか、喋るスピードが早いんだよ、あんた。もっと、ゆっくり…」

自分の手に返ってきたばかりのノートをもう一度、奴に突き返す。

私だつて、「回でちゃんと理解したかった。さっき、あんたが。…あんなに真剣な顔で語った数学のこと。

奴の顔をちらつと見る。

「はあ？なにそれ！なんでそんなに嬉しそうな顔してんの！」

奴は今日一番の笑顔でこつちを見る。あー、ムカツク！！何考えてんだ？こいつ？

「おまえってほんと、考えてることすぐ顔に出るよな。」

え！うそ！

「ほら！今、嘘！って思っただろ？おまえ、面白いよな。」

面白い？私が？そっか、面白いのか…。つて！

「はあ！何それ！こつちは全然面白くないわ！数学なんて、授業でもちゃんと理解出来ないのに、急に婚約数とか言われて！サラッと説明されて！わかる訳ないだろ！」

あんまり勢いよく喋ったから息が切れた。

奴はお腹を抱えて笑っている。なんだよ、全く…。こつちは、あんたを追いかけるので精一杯だつていうのに。遠くに行こうとするなよ！もう、これ以上。

「はいはい、分かったよ。ちゃんと教えてやる。しっかり聞いとけよ。」

奴の左手がシャーペンを握る。そして、「回。綺麗な円を描いて、シャーペンを回した。

「じゃあ、まず48。48の約数、全部言つて。」

「え？約数？48の？なんで？」

奴の呆れ顔を見るのは、今日で何度目だろう…。うん、ごめんなさい。

「必要だからだよ！知りたいんだろ？婚約数！じゃあ、黙って従え！」

「はい！すみませうん。えーっと、48でしょ。1、2、3、4、6、

8、12…。えー、後は…。」

奴は私が言った約数をノートにメモしていく。

「12の次は？」

「ええっと、じゆ…16…？」

「うん、16。その次は？」

「48！」

「はい、馬鹿。16の次にもう一個あんだろ？約数が。」

奴がシャーペンを愉快そうに回す。は？もう一個？てか、今さりげなくバカつて言つた？

「あと一個?ええ…。じゃあ、20。」

「いや、じゃああってなんだよ!22だよ、ちゃんと考えるよ。」

奴は大爆笑している。奴の笑い声は、明るくて、本当に楽しそうで、大好きだ。

「考えたよ!惜しかったじゃん、20と22、2しか差がないじゃん。」

「2もあるじゃんかよ!はあ、もう。48の約数は小さい方から1、2、3、4、6、8、12、24、48です。じゃ、次。75の約数は。」

「75→6、えっと、1、2、3、5、…」

「おい!待って待って。いま2って言いました?あなた?75は奇数だから。」

奴は失礼にもシャーペンの先を私の方に向ける。

「あ、そっか。えっと、1、3、5、15、26…、75、かな…。」

奴の方を見る。お!ちよっと嬉しそうじゃん。

「うん、正解。75の約数は小さい方から1、3、5、15、26、75だな。」

奴は48の時と同じようにノートに約数をメモして行く。

48の約数→1、2、3、4、6、8、12、16、24、48

75の約数→1、3、5、15、25、75

私はノートをのぞき込む。

「うーん、全然、共通点とかない気がするけど…。どうなれば婚約数なの?」

奴はニヤニヤしてる。

「まあ待ってって、ここからが面白いんだから。婚約数とは、異なる2つの自然数の組で、1と自分自身を除いた約数の和が、互いに他方と等しくなるような数の事である。」

そう呟いて、奴はすごい勢いでノートに何か書き始めた。

48 $2+3+4+6+8+12+16+24=75$

75 $3+5+15+25=48$

1と、自分自身だけを除いた約数の和!え?ナニコレ?ていうか、これって凄いいんじゃないの!」

「これが、婚約数だよ。理解しましたか?」

奴が優しく微笑む。

「これ、本当なの?計算、間違ってたんじゃない?」

奴は楽しそうに笑って、ノートを私に渡す。

「失礼な奴だな、気になるなら自分でやってみれば?」

私は恐る恐るノートに手を伸ばす。ペンをとって、ノートの隅に筆算をする。

本当だ。すごい。本当に48と75になった。

「凄いね、これが婚約数…。」

「そうだよ。婚約数って、何億、何千もある数のペアの中から、特別に選ばれた。ペアなんだよ。婚約数は運命の数字。寄り添いあって、一緒にいる、恋人同士みたいだよな。」

奴の目は、キラキラ光っている。本当に。本当に大好きなんだな。数学が。でも、私は。そんなあんたの事が…。

気が付けば、もう夕方。図書館の閉館時間が迫っていた。

「さ、そろそろ帰ろうぜ。うわ、もうの時にやるじゃん。急ぐぞ。」

「難かしいな、数学。」

教科書を片付けながら、ため息がでる。

「ま、頑張れよ。」

奴が私の頭に手を伸ばす。あー、またグシヤグシヤにするつもりか！

「…へ？」

私の頭上に伸びた大きな手は優しく、私の頭をポンポンと撫でた。目の前には奴の優しい笑顔がある。子供っぽい、無邪気な笑顔。頭には、まだ手の感触が残っている。夢？いや、違う…。心臓がドキドキしてる。自分の鼓動がうるさい。絶対、あいつにも聞こえてる。顔も熱いし…。

「お前、なんか赤くね？大丈夫か？体には気をつけるよ、俺たち、受験生なんだから。」

私はカバンのチャックを閉める。誰のせいでこんなになってると思ってるの！

「お、おう。気を付けマース！」

だめだ、まだちよつと声が震えてる。切り替えなきゃ！…でも、その前に…。

「…あ、あのさ、今日は。…数学、教えてくれてありがと。婚約数

も。教えてもらってよかった。それだけ。」

ちゃんと、目を見て言えた。たぶん顔は真っ赤だったけど、ちゃんと教えて、良かった。私は急いでカバンを肩にかけて、早足で図書館のドアを目指す。…顔が熱い。恥ずかしいな。

ふと気づく。足音が聞こえない。あれ？もしかして、来てない？振り返るのは嫌だけど、あいつだけ、図書館に置いて帰るのもちよつと…。

「…おい、生きてますか？」

ちよつとおどけた感じで振り向いてみた。…けど。やめとけば良かった…。

奴は耳まで真っ赤になっていた。メガネを取って、左手で口元を抑えていて、長い前髪の隙間で目は泳いでいる。

すぐに目をそらす。

見えたのは一瞬で、ほんの数秒だったけど。ちよつとそらすのが遅かった…。ヤバイ…。ずるいよ。こんな姿見ちゃったら。

ずつと抑えていた気持ち。心が、体が、頭が。つま先から、小指の爪の先まで、体全体で叫んでる。

私、あんたが好き。

ずつと隠してきた気持ち、膨らんで、だんだん大きくなっていく。

言葉を。短くても確実に、一瞬で気持ちが伝わる言葉を探す。自分の言葉が良いんだ。私だけの…。

…うん、やつぱこれしかない。ちよつと、いや。かなり恥ずかしい

けど。言わなきゃ。

言いたい。今すぐに。

図書館の閉館を告げるチャイムが鳴り始めた。

「ねえ、あの…ね。…もし、私が♫だったら、…えっと、その…。

あ、あんたに♫になって欲しい。」

チャイムが、終わる。

オレンジの光が眩しい。外に出ると、秋の風は冷たくて、徐々に体温を奪われていく。

ただ、心と緩く繋がれた私の左手だけは、心地良い温かさを保っていた。